

自然災害への備えと感染症予防について考える。

3月からゴールデンウィークに至る今日まで、外出自粛要請が続いています。連日、新型コロナウイルス感染症に関するニュースが主になっている状況により、不安が増して「コロナ疲れ」に陥っていないでしょうか。登校再開の判断が長引くことで、友だちとのつながりにも変化があるかもしれません。お互い面を合わせて会話できなければコミュニケーションは制限されるわけですから、寂しさも生まれます。とはいえ、いつ、どこから感染するか見えにくい状況下では、政府が掲げる「3密（密閉・密集・密接）」を抑える行動が必要です。もし今のような社会状況で大規模な自然災害に遭遇し、避難所などに逃げ込まなければいけないとしたら、私たちに為す術はないのでしょうか。

3つの【密】、絶対に避けて

換気の悪い
密閉空間



むんむん

大勢がいる
密集場所



ぎゅうぎゅう

間近で会話する
密接場面



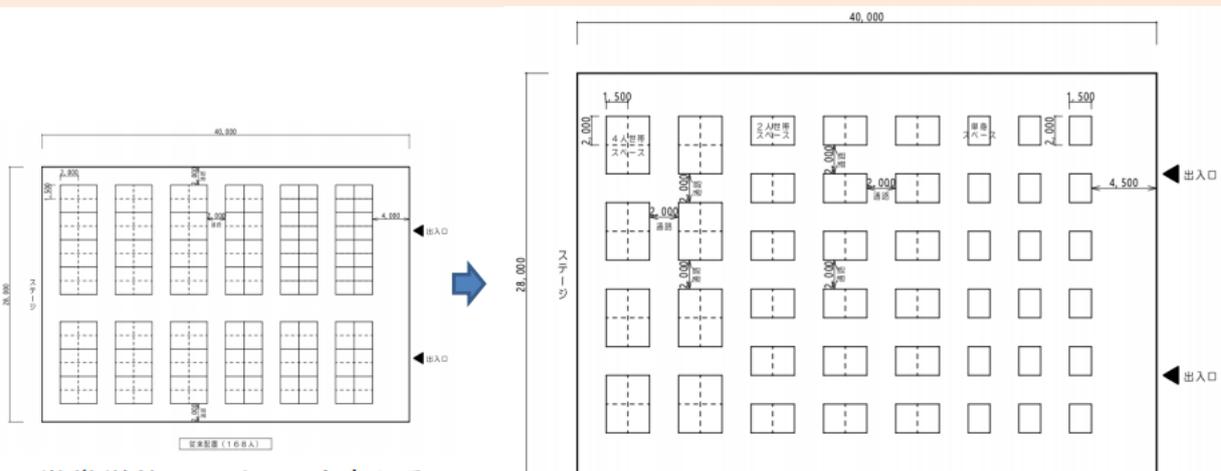
がやがや

5月4日・6日と、千葉県北東から北西を震源として最大震度4の地震がありました。日本はプレートの境目に乗った地形をしているため、いつ巨大地震が起きてもおかしくありません。皆さんにも知ってほしいと思い、災害を研究し被害を減らすための取り組んでいる「人と防災未来センター（神戸市）」の研究者、高岡誠子さんが発表した臨時レポートのイメージ（以下）を抜粋して紹介します。

「避難所開設での感染を防ぐための事前準備チェックリスト Ver.2 簡易版」

http://www.dri.ne.jp/wordpress/wp-content/uploads/sp_report_vol1list_ver2.pdf

1) 避難所運営（レイアウトイメージ）



世帯単位でスペースを考える
他の世帯とはソーシャルディスタンスをとる
平時の検討していた収容人数を受け入れることはできない

ポイント

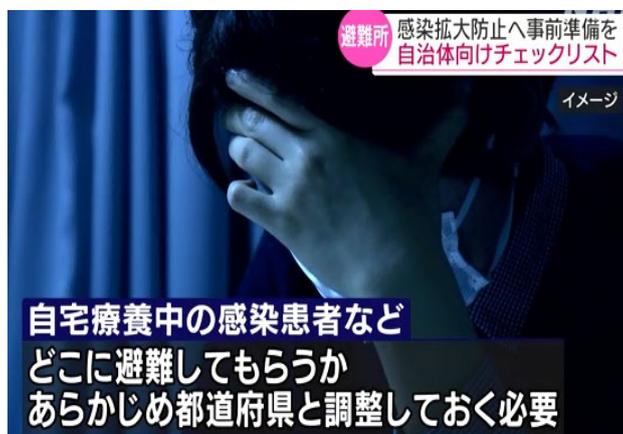
命を守る短期の避難：地区では無く世帯数で区画を区切る方が効率が良い
避難生活が長期化する場合は配慮が必要

ソーシャルディスタンス（社会的距離）に気をつける

Social Distance

ソーシャルディスタンス（社会的距離）は飛沫^{ひまつ}感染等を防ぐために、人との一定距離を保つことが効果的であると普及された用語です。1.8～2mの間隔を取らなければいけないということは、従来の避難所の配置モデルの168人から感染対策モデルの86人に減らさなければいけません。平安女学院中学高等学校の教室使用についても同じように対応しています。日本では2013年に災害対策基本法を一部改正して、避難所の準備および運営の参考とするため、内閣府から指針が公表されています。それには避難所における一人当たりの床面積の基準は記されていませんでした。赤十字社が過去に定めたスフィア・スタンダードを参考にひとりあたり3.5m²を目標にすると大体ソーシャルディスタンスの間隔になるようです。

また避難生活が長期化する場合は、プライバシーを保つために区切られた空間づくりが必要とされます。しかし、感染症を予防するためには「3密（密閉・密集・密接）」を出来るだけ避けること、避難者の健康状態を確認することが大切です。もし感染者が出た場合は、隔離できる施設をあらかじめ自治体と調整しておく必要があります。被災後の不安に加え、このような居住環境に関わるストレスについて対策していくことも必要になることでしょう。



2011年におきた東日本大震災の渦中では、インフルエンザの蔓延^{まんえん}による高齢者の重症化が懸念され、気仙沼市にDMAT（災害医療派遣チーム）が感染対応にあたっていました。そこでは処置困難な環境であるにも関わらず、感染者と濃厚接触者へのケアがうまくいきました。これから、自然災害と感染症の蔓延が同時に起きたとしても、過去に起きたことをしっかり議論し、次々に想定と制度対策をすることが防災の新しいテーマになっていく模様です。

海外でも起きる可能性?! クロアチア首都で地震 (2020.03.22)



3月22日にクロアチアの首都ザグレブで、過去140年で最も強いとされる地震がありました。15歳の少女が死亡するなど死傷者も出たほか、大聖堂や議事堂の損壊など大きな損害も報告されています。一方、新型コロナウイルス感染症はクロアチアでも広がっており、人との距離を保ちながら避難生活をしなければならず厳しい復興作業となっています。アドリア海に面するクロアチアは観光業が主要産業のひとつで、緊急事態宣言下で移動さえままならない様子。生活に困る人も出ると予想されています。